

大学初年次における「CJ教育」の可能性と課題

－キャリア教育的視点による日本語教育を通して－

福重一成*

kazunari_zai_nanjing2011@hotmail.co.jp

中里亜希子**

nakazato@njc.ac.jp

＜目次＞

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1. はじめに | 3.3 調査結果による日本語授業のあり方とCJ教育の必要性 |
| 2. 先行研究 | 4. CJ教育の実践 |
| 3. 留学生と日本語教員に対する日本語教育についての実態調査 | 4.1 CJ教育に至った経緯 |
| 3.1 留学生に対する調査の概要および結果 | 4.2 CJ教育の実践方法 |
| 3.2 日本語教員に対する調査の概要および結果 | 4.3 CJ教育の実践後の効果 |
| | 5. 終わりに |

主題語: 日本語教育(Japanese language education), キャリア教育(career education), 社会人基礎力(fundamental competencies for working persons as translated by METI), 初年次教育(first-year experience)

1. はじめに

昨今、日本国内での就職を目指し、日本語学校や専門学校へ入学する新興国からの留学生が増加している。彼ら留学生は、それらの学校を卒業後、大学へ進学する者も多くいる。留学生を受け入れる大学側にとって、入学前にどのような教育を求め、将来をどのように描き進学してくるのかを詳細に把握することは難しい。大学は入学試験面接での回答から想像し、彼らの望む将来の手助けとなる教育を提供しようと試みるわけである。これまでの日本語教育に求められてきたのは、留学生が大学生として必要な日本語能力の育成(AJ教育)と、留学生が将来日本で就職し、働き続けることのできる日本語能力の育成(BJ教育)の大きな二本柱であった。大学としては、これらの能力を育成できる教員に日本語の授

* 日本経済大学 経営学部 経営学科 専任講師

** 長崎短期大学 国際コミュニケーション学科 専任講師

業を任せてきたであろう。

大学は、留学生への教育として日本語能力を十分に育成し学位の取得を促す一方で、同じく在籍している日本人学生と同じ教育を提供することが求められている。それらの一つが、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育(平成23年(2006)「文科省答申」)、つまり「キャリア教育」である。大学Times(2011)のデータによると、望ましいキャリア教育を検討、予定している大学は28.3%であり、留学生に対するキャリア教育に関するデータがみられなかったことから、留学生に対するキャリア教育にいたっては途上段階であることが予測される。多人数かつ異なる日本語レベルの留学生が混在するクラスを抱えている大学にとってはかなりハードルが高いと言えよう。キャリア教育に携わる教職員が不足している状況下で、留学生に対するキャリア支援の充実をはかる必要がある。筆者は日本語教員という立場で、「日本語教育」と「キャリア教育」のつながりを見出し日本語教育の中に組み込むことはできないか、或いは双方を統合させ融合させていく先に新しい日本語教育「CJ教育(Career&Japanese education)」という可能性が見出せないかを検討したいと考えてきた。

2018年、筆者はA大学にて、キャリア教育を専門とし日本語の授業を担当している教員とともに、以下の調査と実践を行った。第一に、日本語学校から大学に移行した留学生を対象とした事前調査「大学の日本語授業に関するアンケート」、一年次後期に行った「夏休み後アンケート」を実施した。留学生へのアンケートに加え、A大学の日本語教員を対象とした「大学の日本語教育に関するアンケート」を実施した。2つのアンケート結果から、多様化した大学の留学生の「将来のビジョン」や「教員に求める教育」と、教員の期待している「学生の将来を見すえた大学生活」の間にギャップがあり、留学生に対する「日本語教育」と「キャリア教育」には関連性が薄く、双方の統合が必要であると結論付けた。第二に、キャリア教育的視点による日本語教育を目指した実践を行い、授業後、留学生にアンケートとインタビューを実施し効果が得られたことを実証した。

本稿では、「AJ教育」や「BJ教育」といった既存の教育を内包し、取って代わり得る教育として、大学におけるキャリア教育的視点による日本語教育を「CJ教育」としたい。キャリア教育的視点による日本語教育が留学生の日本語能力育成の場において、人生にどの程度影響を与え、学生一人一人が自ら求めるキャリアを意識し、満足した大学生活を提供できるかという課題について述べたい。

2. 先行研究

キャリア教育的視点でおこなう日本語教育についての先行研究は見られないため、大学の初年次教育、AJ教育、BJ教育における問題について論じている先行研究を取り上げ、キャリア教育的視点でおこなう日本語教育の必要性を述べたい。

小林他(2011)は、AJ教育について、「現行の限られた教師と授業時間数で行うには、何かを削らなければ何かを加えることができない」とし、現状の日本語教育環境におけるAJ教育が適切ではなくなっていると言及している。

鄧(2016)はビジネス日本語教育とキャリア支援の実践をおこない、「体系的なカリキュラムの構築はまだ工夫と実践を重ねていく必要がある」と述べている。また、キャリア支援がどのようにおこなわれ、どのような効果があるかについては触れられておらず、対象者のキャリアの発達に結びついたとは言えない。橋本(2011)は大学におけるビジネス日本語教育の一考察として、ビジネス日本語とアカデミックジャパニーズの教授法の差異に触れるとともに、実際のビジネス場面で求められるスキルについて「ビジネススキルを学んだだけで外国人留学生はビジネス日本語を習得したと言っていいのだろうか、出口教育とはいえビジネス日本語教育自体を大学でどの程度すべきか」といった点の検討が必要だと言及している。堀井(2018)は、ビジネス日本語教育について再考し、「初年次教育、キャリア教育などとの重なりと棲み分けについての検討が必要」だと述べている。

以上の先行研究から、現行のAJ教育やBJ教育ではキャリア支援にはつながらず、多様化した留学生に対応できない高等教育機関があるということがわかる。キャリア教育とは、本来学生たちに勤労・職業観を育み、自立するために必要な能力を身につけるというものであり、近年注目されている教育の一つである。キャリア支援の実践が日本語教員の直近の課題として考えられるが、キャリア支援にいたっていない状況の教員、学校が多く存在すると言えよう。

第3章では、筆者がA大学の日本語教育環境におけるキャリア教育の必要性を明らかにするためにおこなった調査について述べる。

3. 留学生と日本語教員に対する日本語教育についての実態調査

第3章では、筆者がキャリア教育的視点による日本語教育の必要性とその対象であるA大

学の留学生、日本語教員の実態を把握するために調査をおこなったことについて述べる。なお、この調査は筆者(「筆者」=主著者。以下、筆者とする)とキャリア教育専門教員(「キャリア教育専門教員」=共著者。以下、キャリア教育専門教員とする)とで実施した。以下は、調査の概要と調査結果である。

3.1 留学生に対する調査の概要および結果

2018年6月から9月にかけて、A大学の日本語文法クラスの留学生に対するアンケート調査を実施した。

対象者はA大学の留学生35名(ネパール22名/ベトナム10名/中国2名/スリランカ1名)の1年生で、対象者の日本語レベルはN2～N4レベル(N2レベル3名/N3レベル19名/N4レベル13名)である。調査は、2018年6月に実施した「大学の日本語授業に関するアンケート」と同年9月に実施した「夏休み後のアンケート」の2点である。

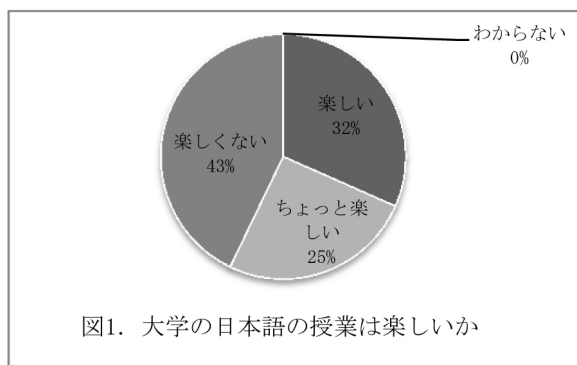
「大学の日本語授業に関するアンケート」は、1～9の設問項目で構成されており、A大学の留学生が初年次の日本語教育を受講し約2ヶ月過ぎた後、日本語授業の環境に対する満足度について明らかにし、授業実践に生かすのが主な目的である。

「夏休み後のアンケート」は1～5の設問項目で構成されており、A大学の留学生が初年次前期の日本語授業修了後、夏期長期休暇を通して、自己の大学生活や将来についてどのような考えに至ったかを調査し、初年次前期からのキャリア教育の必要性を明らかにするのが主な目的である。

以下は、2018年6～9月に実施した「大学の日本語授業に関するアンケート」「夏休み後のアンケート」の調査結果である。

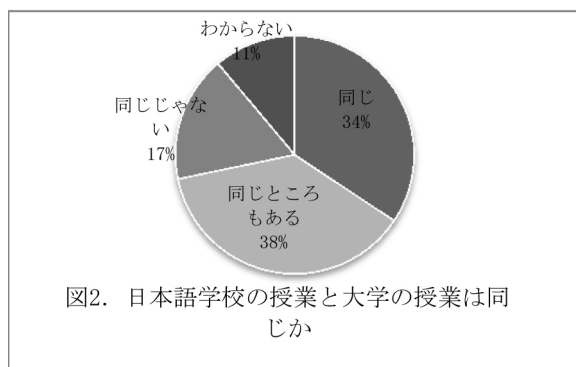
まず「大学の日本語授業に関するアンケート調査」の結果を図1～4と資料1を用いて述べる。

＜図1＞は、選択項目1「大学の日本語の授業は楽しいか」の統計結果である。学生の31%が日本語の授業が「楽しくない」と回答している。選択項目2「理由」として、「日本語の勉強だけ」「時間のムダ」「わかり



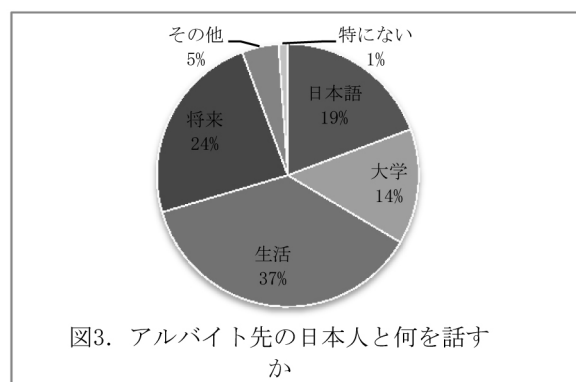
にくい」「漢字がわからない」といった回答があった。このことから、学生は現状の日本語授業に満足しておらず、教員が提供する授業が学生の要求を満たしていないということが言える。

＜図2＞は、選択項目3「日本語学校の授業と大学の授業は同じか」の統計結果である。学生の71%は大学の日本語授業が入学前に日本語学校で学んだ授業と「同じ」「同じところもある」と回答した。選択項目4「日本語学校と大学の授業が同じでよいか」では、学生の65%が「同じじゃないほうが良い」と回答している。

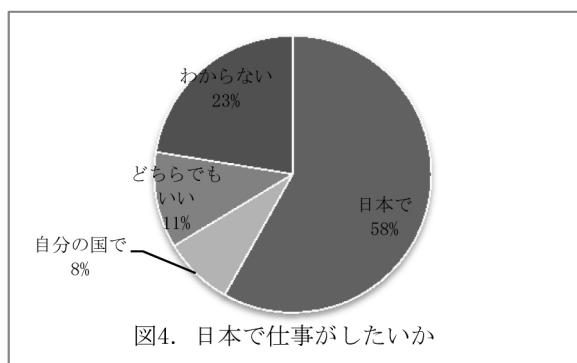


る。加えて、選択項目5「大学の日本語授業で何を勉強したいか」では、「仕事・就職で使う日本語」(71%)、「アルバイトで使う日本語」(57%)、「日本語能力試験」(54%)を勉強したいと回答した学生が多くみられた。このことから学生は、大学の日本語授業に日本語学校とは違う授業内容・質を求めており、資格や就職につながる学習や現在のアルバイトで使える日本語を勉強したいと考えていることがわかる。

＜図3＞は、選択項目6「アルバイト先の日本人と何を話しますか」の統計結果である。学生の65%が「生活」のことについて話し、42%が「将来」のことについて話していると回答した。また、授業後の聞き取り調査では、日本語文法クラスの学生は大学での授業とアルバイトが生活の大部分を占めており、大学の日本人学生との交流が大学前の期待より少ないということがわかった。留学生が入学前から日本人学生と将来について語り、共有したいという思いがあるのかもしれない。本来、このような人生設計に関する内容は大学で出会った学生や教員とも共有されるものであると考える。



<図4>は、選択項目7「日本で仕事したいか」の統計結果である。学生の57%が「日本で仕事したい」と回答している。選択項目8「どんな仕事したいか」で、「日本で仕事したい」と回答した学生は「給料が高い仕事」(16%)、「飲食店」(12%)、「簡単な仕事」(8%)がしたいと考えていることがわかった。



<図5>では、自由記述項目9「授業中に授業の内容以外で考えていることを下の絵に書いてください」の回答の中の一例を紹介する。回答を分析した結果、授業中に「アルバイト」(35%)、「将来・就職」(23%)、「学費・生活費」(21%)、「母国のこと・帰国したい」(14%)と考えている学生が多かった。留学生は学内より学外に意識が向いているということが見て取れる。アンケートの項目1～9の分析結果から、A大

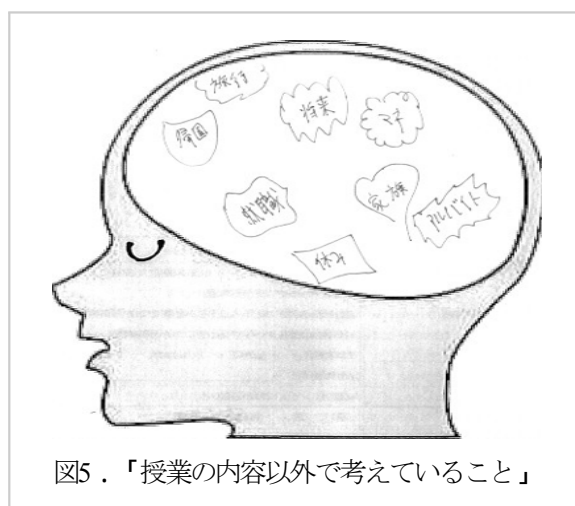


図5. 「授業の内容以外で考えていること」

学の留学生は、現行の日本語教育には満足しておらず、自分が望んでいる将来に向かうための教育を大学で受けていないと考えていることがわかった。

次に、「夏休み後のアンケート」の調査結果について述べる。記述項目1「春学期にあなたは何をしたか」は、春学期を振り返り、授業と自己とのつながりを見出してもらうための問いである。「勉強」(34%)、「アルバイト」(26%)といった回答が多くみられる中、春学期は「勉強ばかり」「勉強だけ」といった「勉強」を強調し、他の活動ができず満足できなかったことがうかがえる記述が全体の28%あった。

記述項目2「今年の夏休みに大学生として何をしたか?」は、夏休みに大学生としてどのように過ごしたかを振り返ってもらうものである。アンケートの結果から、学生のほとんどはアルバイト(74%)のみに力を入れており、学生自身の「大学生である」という自覚や将来への

準備に対する意識づけに春学期の学びが影響を与えているとはいえない。

選択項目3「2018年の夏休みに、将来について考えたか」では、将来について自己研鑽をどの程度おこなっていたかを明らかにするための問いである。アンケート結果から、自分の将来について考えた学生は5名(14%)しかおらず、将来について考えたり、計画を立てるなどといった時間をとっていなかったことがわかる。

記述項目4「大学生は本来何をすべきか」では、学生自身が理想の大学生像と自己とのギャップを知るための問いである。大学1年次の半年が過ぎた学生の多くが、理想の大学生像を持っておらず、「何をすればよいかわからない」(63%)といった状況のようだ。「将来の勉強」(17%)、「自分のレベルを上げる」(9%)といった回答は全体の三割に満たなかった。

記述項目5「秋学期に何を大切にしながら過ごしたいか」では、学生の将来への抱負を聞き、春学期の初年次教育が学生の将来設計にどの程度影響を与えたかを知るための問いである。春学期と同様に「勉強」(37%)、「アルバイト」(43%)と答えた学生が大半を占めており、秋学期への具体的なイメージや計画がないことがわかる。

以上の回答結果から、A大学の初年次教育は、学生の夏休みの過ごし方、夏休み後の考え方に影響を与えておらず、学生が「大学生」になりきれていない状況がうかがえる。

3.2 日本語教員に対する調査の概要および結果

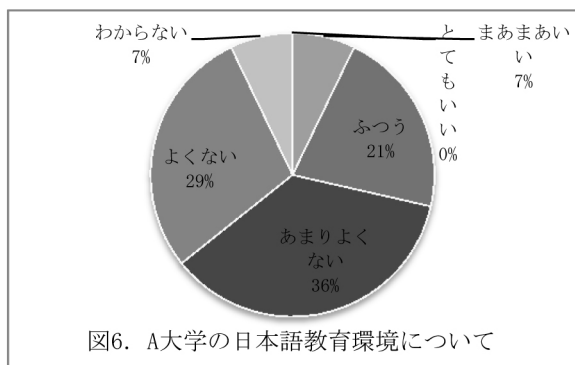
2018年9月、A大学の日本語教員を対象としたアンケート調査を実施した。

以下は、2018年6～9月に実施した「大学の日本語授業に関するアンケート」「夏休み後のアンケート」の調査結果である。

対象者はA大学で日本語授業を担当する日本語教員14名(専任7名、非常勤講師7名)である。調査は、「大学の日本語教育に関する教員アンケート」の1点である。

「大学の日本語授業に関する教員アンケート」は1～5の設問項目で構成されており、大学で日本語授業をおこなう日本語教員がA大学の日本語教育の現状をどのように捉えているかを明らかにするのが主な目的である。

選択項目1「A大学の日本語教育について」<図6>では、過半数の教



員が「よくない」・「あまりよくない」を選んでおり、何かしらの原因でA大学の日本語教育環境に不満を持っていることがわかる。

選択項目2「A大学の日本語クラスにおける問題の原因」<図7>では、過半数の教員が「学生数が多い」「学生間にレベル差がある」「学生が授業中集中していない」を選んでおり、その他、以下の記述回答があった。

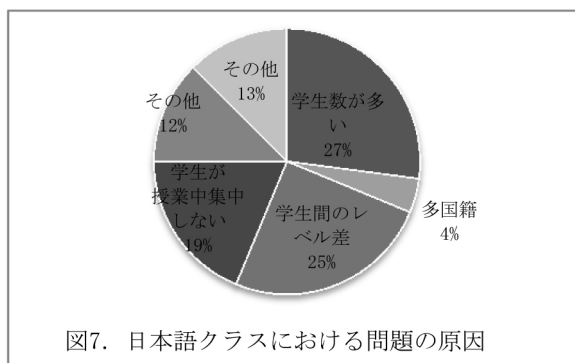


図7. 日本語クラスにおける問題の原因

- ・大学全体の勉強しない雰囲気が、日本語クラスに影響している。
- ・能力、意欲の低い学生が多い。
- ・入学時のレベルを上げてほしい。
- ・教材研究の資料、機会、先生同士の相談の機会が少ない。

選択項目3「日本語の授業時に特に意識していること(3つ選択)」は、<表1>のような回答結果となった。

<表1> 「日本語の授業時に特に意識していること(3つ選択)」

学生の嗜好	AJ	BJ	漢字の指導	読むこと	書くこと
4	2	0	3	5	3
聞くこと	話すこと	JLPT	コミュニケーション	学生の将来	その他
1	6	2	10	3	3

その他、以下のような記述回答がみられた。

- ・学生の能力に合わせること。
- ・日本での生活を円滑にすること。
- ・日本的価値観の理解。

は、キャリア支援を意識しているか否かの項目として準備していたが、選択した教員が全体の約二割であったことから、A大学の日本語教員はキャリア支援につながる教育へ

の意識が低い教員が多いことがわかる。

また、記述項目4「A大学の日本語教員が考える『留学生の将来』について」の回答結果は表2の通りである。回答結果を教員が考えている学生の外発的動機・内発的動機の2つに分類した。A大学の日本語教育環境には留学生の将来に向けた教育としての課題が多く、未回答者を除く全ての教員が不安を抱いていることがわかった。

<表2> 「A大学の日本語教員が考える『留学生の将来』について」

(1)教員が考える「学生の外発的動機」 ・日本での就職を希望する学生もいるようですが、N2・N1の必要性を感じている学生は少ないように感じます。みんなバイト先からの社員登用を狙っているのでしょうか。 ・留学生の大半は卒業時までには大学レベルの日本語に到達することはむずかしいと思われます。しかし、8単位分を勉強するわけですから、例えば、JLPTなどの資格取得、実用日本語の運用力の向上など、各々のレベルに合わせて、目標を持って勉強を進めていけるような日本語教育をしたいと考えています。つまり、学生自身が四年間の日本語学習の「成果」を実感できるような教育ができれば...と考えています。 ・4年生で、就職を決めてとてもがんばっている学生も大勢いますから、大学に来た目的を強く意識できるような雰囲気作りがさらに必要か、と思います。 ・掲示板を見ると、非漢字圏の学生の就職者数が少ないように見えます。1年生から就職を意識した取り組みがもっとあればいいのではないかなと思います。 ・日本の労働力不足から、留学生の卒業後の就職がしやすくなるよう法律が改正されるかもしれないという記事を見ました。今後、卒業後の就職率が上がってくれば、日本語力を上げれば就職できるんだという意識が芽生え、学生のモチベーションも上がるのではないかと期待しています。 ・日本で就職したい学生が増えているが、就職戦線に勝ち残れるか心配。面接でいい結果を残しても、筆記で落ちる学生がいて聞いたことがある。特に非漢字圏の女子が心配。 ・大変だと思います。就職したいという思いを支援できるSystemや環境が整っていないので、何人も人間的、学問的成長が期待できないのかも... ・2極化(就職までを見据えた学生と就労目的) ・工場など、大卒者として、あまり望んでいないところに就職する学生が多いように思う。 ・心配ですが、日本語があまり上手じゃない学生でも就職が決まっている人もいるようなので、少し希望が持てます。
(2)教員が考える「学生の内発的動機」 ・しっかりと目標を持って努力できる学生はいいが、向上心を持たず、積み重ねる努力をする気もない学生はどうするのか。どうなっていくのか心配になる。 ・希望を持っている学生もそうでない学生もいますが、大学に入った以上すべきことはしっかりサポートしたいと思います。 ・公共のものを大切に扱うなどの日本のマナーも教育していく必要がありそう。外国人学生が増え、校内も汚れているような...。企業に印象よく映るための教育を意識すれば自ずと学生の意識も高まるのでは。

3.3 調査結果による日本語授業のあり方とCJ教育の必要性

A大学でのアンケート結果から、現状の初年次日本語教育では学生が授業への不満や将来に対する不安を抱くことになり、学生の人生に影響を与えるような有意義な時間とはいえないといえる。多くの大学では少子化により留学生の入学に力を入れざるをえない状況である。留学生数の増加、多様化が進んでおり、日本語授業を必修としている大学も多い。1節で示したように、A大学のように初年次の日本語教育に問題を抱えている大学は多分に存在することが考えられる。また、AJ教育やBJ教育のように、留学生の能力向上のための授業は多くの大学でおこなわれているが、それらの第一の目的は「日本語能力の向上」であり、A大学のような日本語教育環境の問題の改善には結びつかない。本稿で示すキャリア教育的視点による日本語教育が、これらの問題解決につながる方法の一つであることを実証するため、第4章では筆者が実施した授業実践とその効果について述べる。

4. CJ教育の実践

第四章では、キャリア教育視点による日本語授業(以下、CJ教育とする)実践の方法と、授業後におこなったアンケート結果を分析し、CJ教育の効果と課題について述べる。

4.1 CJ教育実践に至った経緯

CJ教育の取り組みは、筆者がA大学の日本語授業環境の改善をはかるため、日本語授業も担当していたキャリア教育専門教員に相談したことがきっかけとなった。A大学の日本語クラスの大きな問題点は、外国語の授業にそぐわない多人数(25名以上)のクラス構成で、クラス内の学生のレベル差が大きく、学習意欲が低く、何らかの悩みを抱えている学生が多いことであった。キャリア教育専門教員によると、留学生が受ける授業の際、「キャリア教育」を意識しているという。具体的には、キャリア教育的なテーマを授業に取り入れおこなうグループワークである。

筆者は、日本語授業で日本語教育レベルの向上に加え、キャリア教育的視点に立ったグループワークを授業に取り入れることにより、～の問題を改善できるのではないかと

いう考えに至った。その後、筆者はキャリア教育専門教員との情報共有を重ね、2018年6月に初年次の日本語クラスでキャリア教育的視点によるCJ教育をおこなった。

4.2 CJ教育の実践方法

第二節では、2018年6月、A大学の日本語文法クラスでおこなったCJ教育を実践例とし、その方法について述べる。

第一に、自らキャリアを切り開いていく上で必要と位置づけられている「社会人基礎力」<図8>の3つの能力「前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力(12の能力要素)」を意識した授業を展開した。具体的には、「グループシート」<表3>配布による毎授業のグループ学習と「私のシート」<表4>による自己の振り返りをおこなう。社会人基礎力とは、2006年に経済産業省が「大学生が社会人になるために必要なもの」として提示し、大学でのキャリア教育プログラムにおいて参考とされているものの一つである。



<図8> 「社会人基礎力」(経済産業省2006)

第二に、既存の日本語授業に取り入れることができるキャリア教育的視点によるテーマ(例:「私の苦手なもの」「私を伝える」など)を毎回用意する。

<表3> 「グループシート」

グループシート(年 月 日)	
グループ名 (名前の由来)	-----
グループメンバー	リーダー() サブリーダー() 書 記() 発表者()
グループの活動目標	例)必ずみんな一言発言する。友達の発言は最後まで聞く。
各メンバーの活動の 振り返り	リーダー: サブリーダー: 書 記: 発表者:

「グループシート」は、チームで働く力の要素である「発信力(自分の意見をわかりやすく伝える力)」、「規律性(社会のルールや人との約束を守る力)」、「傾聴力(相手の意見を丁寧に聞く力)」以上3つの要素を伸ばすのがねらいである。

<表4> 「私のシート」

_____年__月__日 学籍番号 _____ 名前 _____ 私のシート 今日のテーマ「 _____ 」	
1. 今日の授業はどうでしたか。	
2. 今日の“私”はどうでしたか。	

「私のシート」のねらいは、第一に前に踏み出す力の要素である「主体性(物事に進んで取り組む力)」を伸ばすこと、第二に自己を振り返る時間にし、「課題発見力(現状を分析し、目的や課題を明らかにする力)」を刺激し、自省や授業の取り組み方を改善していくために配布するものである。

以上の2点を取り入れた日本語授業を本稿ではCJ教育の一つとする。

4.3 CJ教育実践後の効果

CJ教育の授業実践後におこなった「今日の授業アンケート」の結果を分析し、CJ教育の効果について述べる。

選択項目1「コミュニケーションをよくとれたか」の回答結果から、学生はコミュニケーションを「とれた」(95%)、「少しとれた」(5%)と考えており、「とれなかった」(0%)と回答した学生がいなかった。教員が準備した役割を学生に伝え、学生がその役割を理解し、規律を意識して動いたことがわかる。つまり、自分の意見をわかりやすく伝えるとともにグループメンバーの意見に耳を傾け、規律ある行動をしていたと言えるだろう。

選択項目2「自分で決めたことをがんばってしたか」の回答結果から、学生は自分で決めたことをがんばって「した」(95%)、「少しした」(5%)と考えており、与えられた役割に責任を持ち、その役割の中に何らかの価値を見出せたと言える。

選択項目3「グループの人と協力できたか」の回答結果から、「できた」(71%)、「少しできた」(17%)と回答している学生が過半数を占めており、この授業を通し、同じグループのメンバーと協力しつつ、主体的に物事に進んで取り組んでいたことがわかる。「できなかった」(9%)、「わからない」(3%)と回答した学生は、自分の役割と他者の役割との関係性がわからず、協力する方法を考えるにいたらなかったのかもしれない。

選択項目4「授業は楽しかったか」の回答結果から、1名(3%)を除いたすべての学生が「楽しかった」(88%)、「少し楽しかった」(9%)と感じていることがわかる。

社会人基礎力として定義づけられている「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を育むきっかけとなったのではないか。このグループワークが学生にとって、日本語授業だけでなく、職場や地域社会における活動で実践する際のヒントとなり得るだろう。

5. 終わりに

大学初年次日本語教育の新たな試みとして、キャリア教育的視点による日本語教育であるCI教育の実践をおこない、以下の効果がみられた。

社会人基礎力の要素である「傾聴力」「発信力」「規律性」「主体性」を向上させるきっかけを作ることができた。学生は自分の日本語能力を使い、他者とのコミュニケーションをはかる活動の中で、日本語が通じる喜びや相手の考えを聞く楽しさを実感できた。

それまで日本語学校の授業との違いを感じず、授業に集中できていない、或いは積極的に参加できていなかった学生に対しては、非常に効果的な取り組みであったと言える。「社会人基礎力」を意識したグループワークとキャリア教育的視点によるテーマを取り入れた授業の実践により、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促すという教育の一方法を示すことができた。

だが一方で、キャリア教育的視点による日本語教育の実践においては、「グループシート」や「私のシート」のようなワークシートの準備、配布、回収後のチェック等、普段の授業より日本語教員にかかる負担が大きく、実施する難しさが課題として見えてくる。各大学が育てたい学生像に合う日本語教育とキャリア教育の融合、或いはキャリア教育的視点による日本語教育には以下の二つの課題が考えられる。第一に、各大学が育てたい学生像、社会が求める学生像、そして、学生一人一人が考える各自のキャリア発達における自分の姿を把握し、それらを融合させた「個人」をどのように形成していくのか、第二に、その形成過程において、日本語能力の育成にたずさわる教員の質的向上、学生支援のあり方について今一度、全学的な共通理解が得られるかである。

キャリア教育が十分に実施できていないと考える大学或いは教員が、この社会人基礎力を基にしたキャリア教育的視点による日本語教育を参考に、A大学と同じような状況にある大学で実施可能な日本語教育を再構築していく視点となることを期待したい。

【参考文献】

- 池田伸子(2009)「留学生の就職を支援するための実践的日本語教育について」『立教大学ことば・文化・コミュニケーション』1巻、pp.131-142
- 伊藤春子・比留間洋一(2019)「私費外国人留学生の特徴：アルバイトに関する意識実態調査から」『星城大学研究紀要』(19)、pp.29-36

- 大江道雅(2017)『新移民時代—外国人労働者と共に生きる社会へ』明石書店
- 久保田学(2018)『留学生のための就職内定ワークブック』日本能率協会マネジメントセンター
- 黄美蘭(2012)「アルバイト先における被差別感の原因帰属と解決行動との関連-中国人私費留学生の場合-」
『人間文化創成科学論叢』第15巻、pp.73-82
- 高田健二・川村浩大伸(2018)「学生アルバイト従業員のストレス・知覚された組織的支援・離職意思の
関係」『日本経営工学会論文誌』Vol.69、pp.47-60
- 内閣府男女共同参画局ホームページ(2016)
http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/law/16.html(参照日2019年5月5日)
- 南雅彦(2017)『社会志向の言語学 豊富な事例と実践研究から学ぶ』くろしお出版
- 村上律子(2015)「学部留学生の社会参画の過程における言語管理：アルバイト場面でのインターアクション
を中心に」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』292、pp.45-54
- 「経済産業省」「社会人基礎力」とは(2006年2月)
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf>
- 小林浩明・清水順子・則松智子(2011)「大学日本語教師の持つアカデミック・ジャパニーズ観」『北九州私立
大学国際論集』、pp.27-39
- 「大学Times」大学の新しい「教育力」大学選びの新基準(2011年7月)
<http://times.sanpou-s.net/special/vol2_1/>
- 「中央教育審議答申」今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1303768.htm>(2011年4月)
- 鄧蓉(2016)「ビジネス日本語教育とキャリア支援の実践報告—「準社会体験プログラム」事例から—」『平安女
学院大学研究年報』16、pp.74-79
- 橋本智(2011)「ビジネス日本語とアカデミックジャパニーズの連続性について：大学におけるビジネス日本
語教育の一考察」『徳島大学国際センター紀要・年報』、pp.1-7
- 堀井恵子(2018)「ビジネス日本語教育研究の目指すもの」『BJジャーナル』創刊号、pp.3-15

논문투고일 : 2019년 12월 30일
심사개시일 : 2020년 01월 16일
1차 수정일 : 2020년 02월 07일
2차 수정일 : 2020년 02월 13일
게재확정일 : 2020년 02월 17일

＜要旨＞

大学初年次における「CJ教育」の可能性と課題

－キャリア教育的視点による日本語教育を通して－

福重一成・中里亜希子

2018年、筆者はA大学にて、キャリア教育専門教員とともに、以下の調査と実践を行った。

最初に、A大学の留学生と日本語教員に対する調査を行い、その結果をもとにキャリア教育的視点による日本語教育を目指した実践を行った。最後に留学生への授業後アンケートとインタビューを実施した。

本稿では、「AJ教育」や「BJ教育」といった既存の教育を内包し、取って代わり得る教育として、大学におけるキャリア教育的視点による日本語教育を「CJ教育」と呼ぶことにする。留学生の日本語能力育成の場において、学生一人一人が自ら求めるキャリアを意識し、満足した大学生活を送るために、キャリア教育的視点による日本語教育が今後の学生の生き方にどのような影響を与えるか、またその教育の可能性と課題について述べたい。

Possibilities and challenges of “CJ education” in the first year of university

－ Through Japanese language education from the viewpoint of career education －

Kazunari, Fukushige ·Akiko, Nakazato

In 2018, one of the authors conducted the following survey and practice at A University with a career education teacher (the other author).

First, we surveyed A University students and Japanese teachers. Based on the results, we practiced Japanese language education from the viewpoint of career education. Finally, we conducted post-class surveys and interviews for international students.

In this paper, As an education that can replace the existing education such as “AJ education” and “BJ education”, we decided to call Japanese language education from the viewpoint of career education at universities as “CJ education”. In order to develop a satisfying university life while being conscious of the career that each student seeks in a place to cultivate Japanese language skills of international students, we would like to describe the impact of Japanese language education from the viewpoint of career education on students’ future lives and the possibilities and challenges of the education.